小児病棟

江川晴

小児病棟

江川 晴

読売新聞社

小児病棟　　定価　九八〇円

著　者――江川晴　河内信子
　　唐沢英子　伊藤由紀子

編集人――守屋健郎

発行人――大原規男

発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の十　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の十一　〒八〇二

印刷所――大日本印刷株式会社

製本所――ナショナル製本

第一刷――昭和五十五年十月二十三日

第五十三刷――昭和五十六年三月二十八日

0095―702940―8715
© 1980, Yomiuri Shimbun-Sha.
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

小児病棟　目次

優秀賞　小児病棟　江川　晴　5

佳作　しおなあら　英語（ことば）を運んできた男　河内信子　75

佳作　わが屋根の下　唐沢英子　133

佳作　流れの糸　伊藤由紀子　205

あとがき　山田太一　265

選考経過　269

裝幀　多田進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」入賞作品集

小児病棟

優秀賞

小児病棟

江川 晴

えがわ・はる　本名、長岡房枝。大正十三年生まれ。東京都出身。看護婦。昭和二十年、慶応大学医学部付属看護婦養成所卒。慶応大学付属病院勤務。現在、日本軽金属株式会社診療室勤務。

二十号室

ガッチャーン、猛烈な音がした。

病室の子供達みんなが振りむいた。

シチュー、ポテトサラダにバタロール二個、おまけにジャムの入った容器までが宙に飛んで、床に叩きつけられた。

「哲也君、おひるごはんよ」

と、モモ子が四角いアルミ製の盆の上に綺麗に盛られた昼食を運んで、谷口哲也のベッドの脇に立った直後の出来事である。盆を一瞥した哲也が、驚くほど強い腕力で、それを払いのけたからだ。不意をつかれて、せっかくの昼食は、盆ごとひっくり返り、見るも無残に、モモ子の足許に散乱した。

「あ、また、やられた」

モモ子は思わず叫んでしまった。

「あなた、バカにされているのよ」

配膳係の年配の補助婦が、こともなげに言った時、同僚の看護婦磯村亮子も飛んできた。

「新入りの看護婦と見ると、哲也ちゃんは必ず、これをやるのよ。香山さんは、まだこの病棟にきて一月くらいでしょう」

補助婦が気の毒そうな顔で言った。

「馴れたナースの時でも、お肉がついていないと、ふてくされて、蹴飛ばすんだから」
モモ子より一年先輩の磯村亮子は、肥った体をゆすり、怒った口調で、哲也をにらみつけた。
床に叩きつけられたサラダやジャムは見事なアブストラクトの絵を描いて、モモ子の足許にあった。そのどうしようもない食物を、素手でかき集めながら、モモ子は、こんなはずではなかった、と情けない顔で、初めてこと小児病棟勤務を、婦長から命ぜられた時のことを思い出していた。
あの時は丁度、夜勤があけて寄宿舎に帰る身支度をしていた。内科の福井病棟主任が、そばに寄ってきて、すぐに婦長室に行くようにと、モモ子に伝えたのだった。
近頃勤務で叱られるほどの失敗をした覚えは無し、私生活でも特に注意をされる覚えも無いと、モモ子は思ったが、不安で何となく胸がどきついた。五階の婦長室に行き、恐る恐るドアーをノックしてみた。
「どうぞ」
意外に明るい返事が聞こえた時、モモ子は悪い予感が消えた思いであった。
「香山さん、あなたは、子供好きかしら」
意外なことを聞くと、モモ子は思った。
「はい、とても」
モモ子が答えると、
「本当ですか」
また、念を押すように言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「どんな子でも、ですか？」
「ええ、たいがいの子は……」
「そうですか。それで安心しました。小児病棟の主任から、貴女を是非貰いたいと言ってきているので」
「はい、でしたら、どうぞいかせてください。あの小児病棟勤務は私の夢でした。あそこはまるで、お伽の国のようですもの」
モモ子は、思わず大声で答えてしまった。
「……。お伽の国ですか。しかし、あちらの勤務は、そう楽ではありませんよ」
「はい、それでも結構です」
婦長は安心したように眼鏡を外して、笑い顔を見せた。
モモ子が当時勤務していた内科病棟はほとんどが老人で、長い期間、病み疲れて、家族にも見離され、死と隣り合せの人ばかりが寝ていた。若いモモ子には、老人や大人達の心中の苦しみは理解しているつもりでも、充分に分るはずもなく手をつかねて泣きたい思いの日も、しばしばあった。その点、子供達が相手なら自分も自信があると、胸を張ったのである。
「では、十月から小児病棟に勤務交替をしてください。外科勤務の小川怜子も希望しましたので、二人一緒にオリエンテーションを受けるように」
小川怜子も香山モモ子と同じ高等看護学院を卒業した同級生で、二人は卒業して二年目の二十一歳である。

昭和五十年十月一日付で、モモ子と怜子は小児病棟勤務となった。
「どうしたら、この子に食べて貰えるのでしょう」
べっとりと、汚れた両手を、だらりとさせ、情けない声で、モモ子は、年配の補助婦にたずねた。
「お尻をたたくのよ。それが一番きくわ。貴女の前に哲也の担当だった小川怜子さんは、いつもそうしたわ。だから彼女のいうことは良くきくもの」
補助婦は続けて、
「母親なら、やはりそうすると思うの。わたしも子持ちだから分るけど」
彼女は平然と、ふて寝を続ける哲也を見、磯村亮子と頷き合った。
亮子が、走って持ってきてくれた雑布やモップも、どうしようもなくよごれ、やがてそれらを始末しているうちに、モモ子も、むらむらっとして、もし、この子が自分の肉親であったら、尻をパンパン叩いてやるのに、と、看護婦としての職務も忘れ、怒りの眼で哲也を睨んではみたが、その瞬間、哲也の真赤に糜爛し腫れあがっている臀部を思わずにはいられなかった。
彼は病児ではないか。しかも、癒るかどうかも分らない重い病気を背負っている。哲也には何の罪もないというのに。そう思うモモ子は、哲也を叩くことなど到底出来るはずもない。
谷口哲也、四歳六か月、病名　結腸狭窄。
彼は聾唖であった。先天性ではない。生まれて間もなくから、授乳後の吐乳が多く、生後二か月で、原因不明の発熱が続いた。嘔吐も相変わらず続くので、医師はストマイ注射を始めたのだった。
哲也の父は、当時肺結核で自宅療養を続けており、後に入院となったが、医師は、哲也の発熱や嘔

吐を小児結核と診断したからであろう。哲也のストマイ注射は、かなりの期間続けられた。
それは、小さな赤ん坊にとり、相当以上の量であったに違いない。けれど医師は、それと気付かず、いつ迄も続く嘔吐に首をひねるばかりであった。その間に哲也は、この世の音、殊に人間の言葉を耳に覚えないうちに、重い難聴になっていた。迂闊なことに医師も周囲の大人達も、そのことには全然気付かず、そのまま哲也を、音の無い世界に追いやってしまった。
哲也を強度難聴にした田舎の病院では、二歳になっても言葉を覚えないばかりか、相変わらず、嘔吐を続け、音に対しても何の反応も示さない哲也に手を焼いて、東京の大学病院で精密検査を受けるよう母親に勧め、その責任を逃れてしまった。それ以来、転々と病院を替えて、このA大学附属病院に入院したのが、二歳七か月の時だから、もう一年以上の長い入院生活を続けていた。哲也の病気は、小児結核ではなく、大腸に欠陥があり、嘔吐が続くのもそれが原因であることや、長期ストマイ投与による副作用のために聾唖になってしまったであろうことも、この病院に入院して検査の結果初めて分った始末だった。哲也は生まれ落ちて今に至るまで、病院以外の生活を知らずに育てられたのである。
「食事がすんだら、哲也の腸洗滌をやるぞ」
主治医が、哲也担当のモモ子に言った。
「昼食、食べて貰えないのですが」
「ああ、食わせずにおいてもいいよ。腹が減りゃあ、いつも食うんだから」
主治医も馴れた口調で、別に気にも止めずに言った。

腸洗滌は、哲也の辛い日課の一つだった。長くて太いブヂー（直径一センチ位の赤いゴム管）を、肛門から大腸の狭窄部位まで挿入して、その部分を拡げる目的と、一日分の便を洗滌しながら排泄させる目的の処置である。肛門の周囲は、毎日のこの処置で、炎症を起こし、熟れたトマトのように赤く腫れ上がっている。その上しまりのない肛門からは、ゆるい便が常に流れ出ていた。炎症は肛門を中心に、広範囲にわたっていたから、猿の尻を思わせ、みるからに痛々しいありさまであった。

モモ子が、ふてくされて寝ている彼の尻の下に、ビニール用布を敷くと、哲也はもう身をよじって、

「ウァーオ、ウァーオ」

と、人間離れのした声で喚いた。四歳六か月の幼児とはいえ、死にもの狂いで抵抗する力は、想像以上で、看護婦の二人や三人は突き飛ばされてしまう。仕方がないので、哲也の両手をベッドの柵にくくりつけて、人数の少ない看護婦の労力を補わなければならない。この方法を、モモ子に教えたのは磯村亮子だった。

「だから、二十号室の担当は、いやよ」

小川怜子は以前から、モモ子にそう告げていた。看護婦の誰もが哲也のいる二十号室をそれとなく敬遠した。

「それっ、いくぞ」

主治医は、それでなくとも腫れあがって、入口の狭くなっている哲也の肛門にぐいぐいと、太いゴム管を突っこんだ。

「ギャオー」

哲也は彼を押えつけているモモ子の手に嚙みついた。
「ああ、くせえ」
同室の子供達は、みな部屋から飛び出して逃げて行く。本当は恐ろしいからであろう。
「臭えなあ、ほんとうに涙が出るよ。哲也も辛いだろうが、こちらも楽じゃないよなあ」
若い主治医は、便で汚れたゴム手袋で、
「あばれるんじゃないよ、てつや！」
と、思わず強い力で哲也の尻を叩くと哲也は、ますます暴れ狂うのだった。
「手も、足も、しばっちまえ」
主治医は、こめかみに、青すじを立てて、怒鳴る。
「哲也ちゃん、もう、おしまいよ。だから我慢してね」
モモ子は、もう少しで、おしまいだ、おしまいだと、本当はこれから薬液を流しこみ、洗滌の本番が始まるのに、大声で嘘を叫びながら、いつの間にか、彼のベッドの上に乗り、全身で哲也の体を押しつけていた。そうしながら、これで本当に良くなるのだろうか、いや、良くなる。きっと良くなる。哲也の現状を救うための強制処置でなければ、関係者の総てが、余りにも惨めではないか。頼むから我慢して頂戴。お願いだから泣き叫ばないで頂戴と、汗みどろだった。
ブヂーの先端から、ダクダクと洗滌液で薄められた汚物が噴き出て、膿盆（のうぼん）一ぱいに溢れた。便の飛沫は容赦なく飛び、主治医や、モモ子の白衣は黄色く汚れ、便臭が、体中に沁みこんでゆく。するとまた、モモ子は、

「ああ、こんなつもりではなかった。こんな病棟のはずではなかった」
と、心の中で叫んでしまう。そして初めてこの病棟に挨拶にやって来た時の快い緊張感と、興奮を、また、思い出していた。
あの日、小川怜子と二人で病棟に挨拶に向う途中、怜子が言った。
「あの病棟は子供の天国みたいやね。子供らは、毎日消毒した白いパジャマを着て、それが、とても可愛らしいんやて。男の子も女の子も、お揃いのパジャマやで。そいで、おもちゃの山の中で遊んでいるという話やわ。両親は付きそってはらへんから、面倒でなくて、いいんよ。まるでお伽の国やね」
大阪生まれの怜子は、時折、関西弁を使う。
「病棟勤務というより、保育園勤務みたいね」
モモ子も、なんとなく、はしゃいで言った。怜子が言うとおり、挨拶をすました木原病棟主任に、ひとまわり案内された折り、真先に目に入ったのは、壁に貼られた楽しい絵だった。それは病児達の一日の生活のスケジュールを順序よく描いたものだ。所々に、病児達のスナップ写真も貼られている。病児達が、洗面をしているスナップの横には、
「おはようございます。朝です。洗面七時」
とあり、大きなテーブルを囲んで愛らしい女の子や、男の子が、パンを片手に牛乳を飲んでいる絵は、食事時間を表わしている。みんなでテレビを見ている写真の次に、看護婦が紙芝居をしている絵もあった。怜子は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.